

〈SATO YAMA UMI プロジェクト〉

2020 年度ユース海外インターンシッププログラム 活動報告書

カンボジア派遣 花嶋 咲良



派遣国：カンボジア

受け入れ先団体：Mlup Baitong

滞在期間：2020 年 02 月 01 日～2020 年 02 月 25 日

夜が明け、朝の太陽が輝きはじめると、鶏の鳴き声で目を覚ます。日が暮れると、光害のない村では満点の星空が広がる。「自然」との共に暮らす生活は、時間に支配される日本での日常を忘れ、美しいものを美しいと心から感じさせてくれるものであった。

「豊かさ」の価値観を押し付けることなく、大切な家族が住むこの村で人々から愛され、人々を心から愛し、そして改めて自国への愛を感じた1ヶ月。

それがいかに素晴らしく、かけがえのないものであったか、この報告書を通して多くの人に伝えることができたなら幸いである。



インターンシップ参加の背景

今回、カンボジアでのインターンシップ参加には、主に二つの目的があった。一つ目に、様々な「違い」を感じられる環境に身を置くことで自分自身を知ることだ。自分自身を知るためには他人が必要だ。他人の存在が「違い」を感じさせ、その違いを認め、尊重しあえた時、自分自身をも認め、受け入れることができる。日本で生まれ育ってきた私の持つ価値観や考え方は、まさに日本的なものである。そのため、自分の中にある常識が常識でない環境に身を置くことで、柔軟な対応力が養われ、視野も広がり、新しい価値を創り出すことができる考えた。

二つ目に、私は昨年、政府関連の国際交流事業に参加した際、約二か月間、「質の高い教育」について ASEAN 諸国の青年たちと議論を重ねてきた。学校教育の現状、家庭事情や、教師の質など、「教育」という分野におけるあらゆる問題に対し、「夢や希望にあふれた未来」を求め、仲間と共に奮闘した。この学びを「知識」だけで終わらせたくないと思い、現地での「実践」を求め、参加を強く志望した。

また、私にとって「インターンシップ」という経験は初めてであり、これまでにない期待、使命感、責任感があった。「受け身の作業ではなく、主体的に活動すること」を全体の目標とし、カンボジアでの一か月を迎えた。

インターンシップ活動報告

現地では二つの小学校、二つの中学校で四つのカテゴリーに分けた授業を実践した。
各授業内容は以下である。

1. 学校体育の実施

一つ目に学校体育の実施である。カンボジアでは、体育の授業が義務教育に取り入れられたばかりであり、まだまだ浸透していないと聞いていた。しかし実際に現地を拝見すると、学校の校庭は Mlup baitong* のサポートにより、ごみは少なく、草花が植えられており、想像していたより綺麗な校庭であった。また、先生方の「学校体育」への関心は高く、今後、学校体育が広がっていく未来も遠くないと考えたため、子供たちには、「学校体育の素晴らしさ、楽しさ」を最大限に伝え、教師には「学校体育の重要性」をより感じてもらうこと。また、正式な体育教育の知識を増やし、この地にあった体育教育を共に考えていくことを目的に授業実践を試みた。講義としては、運動の重要性とその効果、実際に日本で行われている学校体育の様子などを子供たちに教えた。実技では、簡単なダンスを一緒に踊った。ダンスを選んだ理由は、「ダンスこそ、言語の壁を超えたコミュニケーション」だと感じたからだ。また、授業をしていくにあたって、子供たちとの信頼関係を築くことをまず大切にしたいと考えていたため、「楽しい」という素直な感情を共有することができるダンスが最適であると考えたからだ。



*：現地の NGO 団体

2. 英語教育の実施

次に英語教育である。子供たちの多少のレベルの差を配慮した授業を準備していたものの、実際は、学校ごとに大きなレベルの差があり、教育の不統一性や、マニュアル不足を感じた。また、授業風景を拝見した際、一方通行な授業スタイルが見受けられたため、生徒参加型の授業実施を心がけた。授業内容としては、英語の歌を通して単語を覚えたり、体を動かしたりしながら英語を学んだ。体を動かすことで、記憶力も上がり、子供たちの集中力を維持できるよう工夫した。また、英語を担当している先生にも授業に参加してもらい、昼休みには、普段使用している教科書を通して、授業改革を共に考えた。実際、教科書の内容は中学生レベルではなく、とても難しく感じた。これでは、子供たちの「学びたい」気持ちと、先生方の「教えたい」気持ちのずれが生じてしまっていると考えたため、特に、「伝える」ことと、「伝わる」ことの大きな違いを理解することが必要であると感じた。コミュニケーションとは、「伝える」ことではなく「伝わる」ことだ。相手は小さな子供であることを第一に考える授業づくりに共に奮闘した。



3. 環境教育の実施

三つ目は、環境教育である。私自身、個人的に環境問題に関心はあったものの、大学では社会学を専攻しているため、インターンシップ参加が決まったことをきっかけに、環境問題に関する知識と学びを深めた。初めは、「知らないこと」をマイナスに考えていたが、素人としての素直な感覚を大切に、村の人々とより近い立場で環境問題に向き合うことが、私にできることだと考えた。授業内容としては、子供たちにオリジナルペットボトルを書いてもらい、ごみ箱に一人ずつ入れていくというものだ。仕組み自体はとても単純であるが、今後、「ゴミはゴミ箱に捨てる」という認識が人々の中に根付けば、村はきれいに保たれ、オオヅル飛来地である貴重な自然を維持できると考えた。そのため、ポイ捨てができてしまう環境を作らないためにも将来を担う子供たちにしっかり認識してもらいと思い、この授業を実施した。





4. 日本の文化紹介

最後に日本の文化紹介である。「何かの縁があってこの地に来ることができたこと」そして、「数多くある国の中から日本人である私たちが来たこと」を何らかの形で残したいと思い、文化紹介に至った。日本の文化紹介としては、一緒に折り紙を作った。ただ作るだけでなく、折り紙の由来や、千羽鶴には平和や病気の人の回復を祈る意味があることなども伝えた。私たちが帰国した後も、折り紙を通して平和について少しでも思い出してくれると幸いである。



〈まとめ〉

”途上国のために貢献したい” ”貧しい村の人々を助きたい”

渡航前の私は、自分中心の視点だけで状況を判断し、カンボジアでの一か月間にこのような目標を掲げていた。しかし、実際にサポートをしようとしている現地に住むのは、「私」ではない。本当の意味での「サポート」とは、目に見えるものだけではなく、彼ら自身を知り、理解を深め、信頼関係を築くことから始まると考えた。そのためにも、生活を共にするなかで、一緒にいる時間を大切にしよう心掛けた。本プログラムを終え、その任務を全力で全うできたと感じている。

村での生活は、人々の暖かさや優しさを存分に感じ、笑顔に溢れた毎日であった。豊かな自然への感謝。食事への感謝。水への感謝。日本の生活で忘れかけている感謝の気持ちを痛感する日々であった。

また、実際に現地に足を運んだことで、現地の教育環境の整備、環境保全の維持、ごみ問題への理解がより深まり、長期的なサポートの必要性を感じたため、今後も様々な形でかわっていきたいと考えている。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さり、手厚くサポートしてくださった SATOYAMAUMI プロジェクトの皆様に感謝申し上げます。この素晴らしい経験を活かし、日々精進してまいります。本当にありがとうございました。

花嶋 咲良